

## [76] ビデオダンス2006

### 映像舞踊の魅惑と陥穽

2006年7月8日 東京新聞 夕刊

文学や音楽、絵画は過去の作品や名演にふれることが可能である。だが、舞踊は長らく再現の手段を持たなかった。舞踊史を読んで齒がゆいのは、感動の描写ばかりで、実際の舞台がどうなのか正確にわからないことだ。

それがここへきて事情が変わった。ビデオのテクノロジーのおかげでダンスが記録され、後々までの再現が可能になったのである。

そのビデオによるイベント「ビデオダンス2006」がこの五月、彩の国さいたま芸術劇場の映像ホールで大々的に行われた。二週続きのウィークエンドで計六日間、朝から夜までコンテンポラリーダンスのお宝映像を見せる。全部見れば、過去十数年の世界のコンテンポラリーダンスの主要トピックスは一網打尽といっても過言ではない。ルドルフ・バンの一九二〇年代の作品や初期のピナ・バウシュなどの金字塔的な作品から、エドゥアール・ロックやマッツ・エック、勅使川原三郎など現役の主力陣、はたまた近藤良平や康本雅子など日本の新人まで含まれている。

## [76] ビデオダンス2006

### 映像舞踊の魅惑と陥穽

2006年7月8日 東京新聞 夕刊

私も時間の許す限り通いつめ、それでも多くを見逃したが、なかで鮮やかな印象を刻んだのがヤン・ファールブルの「オウムとモルモット」だ。美しい全裸の女性たちが頭に袋を被り、巨大なぬいぐるみに抱かれて身もだえる。ほとんど自己を放擲ほうてきしたようなダンスにも息を呑んだが、それを八方から射るカメラの視点がスリリングで、ビデオとは単に記録であるだけでなく、それ自体鋭い作品でもあることに感嘆した。

シディ・ラルビ・シエルカウイ振付の「テンプス・フュジット（逃げてゆく時間）」の突き抜けた官能にも圧倒された。口づけしたままの男女が目くるめくステップで踊りつつ、屋内から通りへ公園へと通っていく。これまで味わったことのないダンス体験だ。

これらのビデオが殊更に魅惑的なのは、過去に生起し、すでに消滅したものであるという感慨。そして未知の、いずことも知れぬ場所で行われたパフォーマンスであるという事実に因るのではないだろうか。ダンスとは現

## [76] ビデオダンス2006

### 映像舞踊の魅惑と陥穽

2006年7月8日 東京新聞 夕刊

前の芸術、つまり今ここで実演されているのだという通常のダンス公演の常識の裏をかく、奇妙にひねった感覚がもたらす魅力なのだ。

それを見ながら考えたことがある。一つは、コンテンツポラリーもこうして古典になるのだということ。コンテンツポラリーダンスの存在理由が「今という時代」にあることは言うまでもない。まさに今のもの、しかも早晚消滅するがゆえの瞬間の輝きがコンテンツポラリーダンスの面白さなのだが、こうして映像になることで歴史ともなり、古典ともなる。それは、今後のコンテンツポラリーダンスが抱え込む自己矛盾になりはしないか。

同様に、映像は皮相のライブ性を洗い流し、作品そのものの持つ硬質な美と意義を顕わにする。九〇年代に発表された作品が今なお斬新である一方で、昨年のお話作がもう時代遅れに見える陥穽もビデオダンスには仕組まれている。